

# 會 報

## 岡山醫學會第419回通常會

同會は10月16日午後4時より岡山醫科大學第1講堂に於て開催す、緒方庶務主幹開會を宣し直ちに下記講演に移る

### 1. 「ウイルス性」疾患の核病理學的研究 (其の1)

流行性腦炎罹患二十日鼠腦及び鼻粘膜に於て發見されたる核包含體に就て

病理學教室 濱崎幸雄君

余は昭和8年以來細胞核の研究に没頭し昭和13年以來組織化學的方法を以て核病理學の研究を續行せり。今春以來 Virus 性疾患の核病理學に着手し田部教授の諒解を得て先づ流行性腦の材料を検索せり。蓋 Virus 性疾患は特殊なる核變化即ち核包含體を形成することに於て病理學的に特殊なる位置を占むるものなればなり。日本並に米國流行性腦炎に就て從來 2—3 の核包含體報告されしも未だ一般に Virus 特異性の包含體として認めらるるものなし、余の使用せし Virus は日本系としては當病理學教室株及び北山内科株、米國 St. Louis 系としては傳研株及び北研株等の固定毒並に今夏分離された佐藤株にして何れも大同小異の成績を得たり。或包含體を一定の Virus に特異なるものなりと斷定するには凡そ次の如き 6 箇條に就て慎重なる検討を加ふるの要あり。(1) 陽性率の問題。余の實驗動物 (170 例) に於ては 100% の陽性成績を得たり。(2) 健康動物は勿論種々なる實驗的腦炎及び Virus 接種後不成功に終りし動物に在りては全部陰性成績に終れり。(3) 核物質との關係如何。余の組織化學的檢索法を用ひて Nucleoproteide, Nucleinsäure, Nucleotide,

Nucleoside, Purinbasen, Histon, Globulin 並に Dahlia 嗜好物質を検せし所凡て陰性の成績を得たり。本成績は本包含體の外來性異種蛋白によりて成形されることを實證するものなり。(4) 分布上の特異性。本包含體は Bergmann 氏細胞及び嗅腺細胞に特に好發する特異性あり、其の他腦内分布に就きても解剖學的に一定の特異性あり(詳細後報)。(5) Virus 小體との關係。余は塗抹標本の Giemsa 改良染色法にて、包含體を取り巻き之と移行する微細顆粒様、面紗狀の青紫色に着染する物質を検出し得たり。本物質は包含體と共に上記諸種核物質を含有せず(詳細後報)。(6) 既知包含體との鑑別(之は次の演題にて述ぶ)。從來流行性腦炎に於て發見されし包炎體(Webster, 高瀬, 池田)は上記 6 箇條の一つも満足せしめ得せざるもののみなり。(上記諸種の核物證明法及び H.E. 染色標本を 10 枚供覽せり)。

### 2. 「ウイルス性」疾患の核病理學的研究 (其の2)

流行性腦炎罹患「マウス」の核包含體と鑑別を要する既知包含體に就て

病理學教室 濱崎幸雄君

永瀬眞吾君

從來 Virus 疾患に特異と認めらるる核封入體中余等の包含體(1)に最も類似するは Virus III に依り惹起さるる包含體(2)及び Herpes-Virus に依る包含體(3)なり。先づ形態學的には(1)(2)間に大なる相違なきも(2)は一般に大なり。(3)の場合にありては顆粒狀構造著明にして核内を充

すもの多く鑑別困難ならず。Feulgen 氏反應は (1)(-)、(2)(+)、(3)(+) 又鐵反應は (1)(-)、(2)(+)、(3)(+) なり。分布上の相違としては (1) は Bergmann 氏細胞、嗅腺細胞、脈絡膜上皮細胞、「グリア細胞」に出現。(2) は神經節細胞、「グリア細胞」、脈絡膜上皮細胞、Bergmann 氏細胞等にして原形質内にも出現す。(3) は神經節細胞、「グリア細胞」、角膜上皮細胞を殊に好み原

形質中にも發現す。動物實驗的には (2) は「マウス」に感染せず。(3) にありては「マウス腦炎」は家兎の夫れに比し輕症にして包含體を形成するは稀なり。上記所見よりして流行性腦炎罹患「マウス」腦及び鼻粘膜に發見する、核封入體は之に類似する既知の Virus 特異性包含體とは明かに區別し得るものなりと主張せり。

---

### ◎ 岡山醫學會第 420 回通常會

11 月 28 日 第 4 (金曜日) 午後 4 時より岡山醫科大學  
第 1 講堂に於て開催の豫定